

開拓使麦酒醸造所 村橋久成

― 歴史を訪ねる旅 (3) ―



下土橋 渡

帯一筋

右ノ者本年九月廿五日當市葺合村ニ於テ疾病ノ為メ倒レ居リ當庁救護中同月廿八日死亡ニ付仮埋葬ス心當リノ者ハ申出ヘシ

明治廿五年十月 神戸市役所

明治二十五年(一八九二年)十月二十二日、
神戸又新(ゆうしん) 日報に次のような行旅
病者の死亡広告が掲載されました。

廣告

鹿児島県鹿児島郡塩谷村

村橋久成

一、相貌年齢四十八歳 身幹五尺五寸位
顔丸ク 色黒キ方薄痘痕アリ 目大ニシ
テ 鼻隆キ方 前歯一本欠 頭髮薄キ方
其他常体

一、着衣紺木綿シャツ一枚 白木綿三尺

村橋久成(むらはしひさなり)。一八四二
〜一八九二年。幕末の薩摩藩士、開拓使官吏。
札幌開拓使麦酒醸造所(現サツポロビールの
前身)の生みの親。

薩摩藩御一門である加治木島津家の分
家・村橋家の嫡男として生まれ、六歳で家督
を継ぎます。薩摩藩第一次英国留学生、いわ
ゆる薩摩スチューデントの一人として英国留
学。帰国後、加治木大砲隊長として二五〇名
の兵をひきいて戊辰戦争に出陣し、新潟・山
形・青森そして箱館を転戦。軍監(戦場で軍

の進退などを監督する役目）として箱館戦争に参戦して、箱館病院長の高松凌雲（わが国における赤十字運動の先駆者）を通じて、榎本武揚に恭順を勧告し、五稜郭が落ちて旧幕府軍が降参すると、榎本らの恭順に立ち合いました。

蝦夷地が平定されると軍監を免ぜられて、いったん鹿児島に帰着。戦功により四〇〇両の恩賞を受けます。翌年の明治四年（一八七一年）開拓使に採用。以後、七重開墾場（現北海道亀田郡七飯町）の測量と畑の区割り、屯田兵創設に伴う札幌周辺の入植地の調査と琴似兵村（現札幌市西区）の区割りを行いました。七重開墾場と琴似兵村の立ち上げを終えて東京に戻ると、今度は開拓使が計画中の麦酒醸造所の建設責任者に抜擢されます。

道内の勧業を促進するために建設された他の官営工場と同様の目的で、北海道産のホッ

プによる麦酒醸造所を建設しようというものでしたが、麦酒醸造所は、試験のためにまず東京に建設し、試験の結果をみたうえで、好成绩なら北海道へ移設するという計画でした。

しかし、村橋は、東京に建設するというのは例によって開拓次官・黒田清隆らの政治的パフォーマンスだと見抜き、北海道における勧業、勧農が目的の麦酒醸造所ならば最初から北海道に建設すべきだと異論を抱きます。

ドイツ帰りの麦酒醸造人・中川清兵衛の雇用を決定し、予定より大幅に遅れて外国注文の醸造備品が届いた明治八年（一八七五年）の暮れ、上局決定を変更し、東京ではなく、最初から北海道に建設することを求める稟議書を提出します。強い反対に合うこと、あるいは村橋が一層好ましくない立場に追いやられることも覚悟しての稟議書提出でした。

村橋の主張は認められましたが、あわせて

葡萄酒醸造所と札幌製糸所も建設せよ、という重圧を負わされての認可でした。明治九年（一八七六年）五月、札幌在勤となった村橋は、中川清兵衛を督励して、麦酒醸造所をはじめ三つの施設建設を急ぎ、同年九月にはすべてを完成させました。もし、村橋の上申がなく麦酒醸造所が東京に建設されていたら、開拓使ビールはどうなっていたか分からなかっただろうと言われます。日本のビール産業の成立は遅れていたかも知れません。

開拓使は、長官の黒田清隆をはじめ、北大の前身・札幌農学校の初代校長を兼務し開拓使廃止後には札幌県令（現在の県知事）をつとめた調所広丈、同じく根室県令となった湯地定基、函館県令の時任為基、屯田兵の父と呼ばれのちに第二代北海道長官になった永山武四郎といった人びとなど、そのキーマンの



開拓使のシンボルである北極星のマークを掲げた札幌開拓使麦酒醸造所（現サッポロビールの前身）。札幌市のサッポロファクトリー内にある。

大多数が鹿児島県士族で占められていました。鹿児島県士族たちが、黒田を頂点として作り上げられた薩摩閥を最大限に利用して栄進を遂げていくなかで、一人村橋だけは閥に与しません。それがまわりの鹿児島県士族たちとの間に軋轢を生み、一方で、栄達を望まないとは言え、自分だけが取り残されていくのではないかという不安にかられ、村橋は自己嫌悪に陥ります。

明治維新の立役者は下級藩士でした。彼らは、なんの束縛もなく自由に動き回れ、倒幕運動に加わることができました。下級藩士に甘んじてきた積年の思いが一気に爆発し倒幕の原動力となり、国家建設の枢機に参画するエネルギーになったのです。一方、藩のエリートだった上級藩士は、そこまで奔放になれません。加えて、英国留学によって激しいカルチャーショックを受けた村橋は、薩

摩藩という一地域でなく、東洋の中の日本という『国家』を意識し、世界の中の『日本人』ということを意識するようになっていたのかもしれない。

あるいは、薩摩閥の輝かしい栄達振りの陰に、戊辰戦争や箱館戦争で散って行った多くの人たちの影を見ていたのかもしれない。

ビール醸造も軌道にのり、明治十一年には札幌本庁民事局副長に任ぜられ、縦横の活躍ができる晴れ舞台が約束されたという矢先の明治十四年（一八八一年）、村橋は開拓使を突然辞職し行脚流浪の旅に出、以後消息不明となります。明治十四年といえ、十年計画の満期が近くなつた開拓使の廃止方針が固まつた年でした。そして、黒田清隆は、開拓使の事業を継承させるために、部下の官吏を退職させて企業を起こし、官有の施設・設備を安

値で払い下げようとした、いわゆる開拓使官有物払下げ事件を起こし指弾されます。村橋が開拓使を辞職したのはそんなときでした。

それから十一年後の明治二十五年十月二十二日、神戸又新日報に行旅病者の死亡広告が掲載されます。裸同然の状態で施療院に収容された村橋は『鹿児島島嶼士族、村橋久成』だけ言い残して息絶えたといわれます。享年五〇歳。北に夢を追ったサムライは、何を思い流浪の人になったのでしょうか。

あまり知られることもなく歴史に埋もれたままだった村橋久成の名が百年の時を超えて再び登場するきっかけになったのが、昭和五十七年（一九八二年）に刊行された作家・田中和夫氏による小説『残響』（第一六回北海道新聞文学賞受賞）でした。市立札幌図書館が時計台内にあった頃、閲覧用の書架にあった北海道史人名辞典の頁をめくっていた田中

さんは、『村橋久成』という名前に目が止まります。それが村橋久成との出会いのはじまりでした。約五〇〇冊にもおよぶ公文録・申奏録・会計書類などを紐解きながら村橋久成の足跡を突き止め、デリカシーと芯の強さを併せ持った清廉潔白な人物像を描き上げました。村橋久成の名が再び人々の知るところとなると、平成十一年（一九九九年）に北海道久成会が発足し、平成十五年（二〇〇三年）七月



村橋久成胸像（北海道知事公館前庭）

の高橋はるみ知事の道政執行方針演説に村橋久成の功績が取り上げられたのを契機に、『胸像「残響」札幌建立期成会』が結成されます。そして、中村晋也日本芸術院会員によって制作されていた村橋の胸像が、平成十七年（二〇〇五年）北海道知事公館前庭に建立され除幕式へと結実しました。

―補遺―

神戸の路上で行き倒れて凄絶な死をとげた村橋久成の遺骨がどうなったのか長い間知られないままでした。ところが百年近くを経た昭和六〇年（一九八五年）になって、東京・青山霊園に墓碑があることが判明し、東京に在住の実のお孫さんの家から『故村橋久成氏葬儀関係文書』と書かれたひとまとまりの文書類が見つかります。

驚いたことに、村橋久成の葬儀は黒田清隆

をはじめとする開拓使元幹部たちの手によってとりおこなわれていました。村橋の葬儀に関する記録書類とその前後にかねらのあいだでやりとりされた数十通の文書類から、開拓使時代はもちろん、幕末・維新にさかのぼって生死をともした仲間に対する薩摩人たちの深い温情と、開拓使廃止から一〇年の月日を経てなお生きつづけた同志的結束の強さ、そして、維新から四半世紀を経たこの当時のかれらの様子をうかがい知ることができると、参考図書（二）にあります。

（元九州職業能力開発大学校教授）

参考図書

- （一）田中和夫著「残響」文化ジャーナル鹿児島社・一九九八年七月第一刷発行
- （二）西村英樹著「夢のサムライ」文化ジャーナル鹿児島社・一九九八年六月第一刷発行